

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問題は句読点を一字に数えます。

ひとりで勝手に掃除してくれるロボット。その能力を飛躍的に向上させるなら、わたしたちの仕事はいつか奪ってしまうのではないかと心配する向きもある。しかし、もうしばらくは大丈夫なのではないかと思う。一緒に④くらしはじめてみると、その「弱さ」もいくつか気になるのだ。

玄関などの段差から落ちてしまうと、そこからはなかなか這い上がれない。部屋の隅にあるコード類を巻き込んでギブアップしたり、時には椅子やテーブルなどに囲まれ、その袋小路から抜けだせなくなりそうになる。「アホだなあ……」

と思いつつも、①そんな姿になんとかほっとしてしまふ。

②こうした関わりのおかげで、わたしたちの心構えもわずかに変化してくる。ロボットのスイッチを入れる前に、部屋の隅のコードを⑥タバねはじめる。ロボットの先回りをしては、床の上に乱雑に置かれたモノを取り除いていたりする。いつの間にか、部屋のなかはきれいに片づいている。このロボットの意図していたことではないにせよ、周りの手助けを上手に引き出しながら、結果として「部屋のなかを掃除する」という目的を果たしてしまふ。

先に述べたように「コードを巻き込んで、ギブアップしやすい」というのは、一種の欠陥や欠点であり、本来は克服されるべきものだろう。(じつは、いつの間にかパワーアップされたお掃除ロボットの仲間も、こうした欠点を克服しつつある……。しかし、その見方を変えるなら、この「弱さ」は、「わたしたちに一緒に掃除に参加するための余地や余白を残してくれている」ともいえるのだ。そこで一緒に掃除する様子を眺めてみるとおもしろい。わたしたちとロボットとは、お互いに部屋を片づける能力を競いあいながら、この掃除に参加している風ではない。どこまで手伝えはいいのか、どのような工夫をすれば、このロボットは最後まで完遂してくれるのか。そうした③行錯〇を重ねるなかで、お互いの得手、不得手を特定しあう。目の前の課題に対して、その連携のあり方を探ろうとする。「相手と心を一つにする」というところまで、まだ距離はありそうだけど、ようやくその入り口に立てたような感じもするのである。

床の上のホコリを丁寧に吸い集めるのは、ロボットの得意とするところであり、わたしたちに真似はできない。一方で、ロボットの進行を先回りしながら、椅子を並べかえ、障害物を取り除いてあげることが、わたしたちの得意とするところだろう。一緒にお掃除しながらも、お互いの「強み」を生かしつつ、同時にお互いの「弱さ」を⑤ホカシあつてもいい。

これも多様性というのだろうか、④そこでは部屋の壁、わたしたち、そして健気なお掃除ロボットという、さまざまな個性やそれぞれの技が協働しあっている心地よい。そうした高度な関わりにあつては、ロボットはすべての能力を自らのなかに抱え込む必要はない。わたしたちもまた完全である必要はないということなのだろう。

でも⑤どうして、このような連携プレーが可能なのだろう。一つにはこのロボットの性格から来るものなのではないかと思う。ぶつかるのを知つてか知らずか、部屋の壁に果敢に突き進んでいく。コードに巻きついて、そこからなかなか離れようとせず、遂にはギブアップ……。そんな失敗をなんとかくりかえしても、懲りることがない。

そのようなロボットのあつけられかんとした振る舞いに対して、「どうして壁にぶつかると知つていて、ぶつかるのだろうか。アホだなあ……」と思ひながらも、いつの間にか応援してしまふ。

先に述べたように、わたしたちの共同行為を生み出すためのポイントは、自らの状況を相手からも④サンショウ可能のように表示しておくことである。「いま、どんなことをしようとしているのか」「どんなことに困っているのか」、そうした「弱さ」を隠さず、ためらうことなく開示しておくことで、お掃除ロボットは周りの手助けを上手に引きだしているようなのである。

もう一つのポイントは、相手に対する「敬意」や「信頼」のようなものではないだろうか。お互いの「弱い」ところを開示しあい、そしておぎなひあう。一方で、その「強み」を称えあつてもいい。このお掃除ロボットは相手を信頼してなのか、その部屋の壁にわたしたちのためにもなく、委ねることをする。一方で、わたしたちも「へー、こんなところのホコリを丹念に吸い集めてしまふわけ」「すごい、これには敵わないなあ……」というわけで、「ここはロボットに任せておこう」ということを徹底させている。

人とロボットとの⑥キョウセイという言葉があるけれど、自らをわきまえたお掃除ロボットは、わたしたちとのあいだで、持ちつ持たれつというキョウセイをちやっかり成功させているようなのである。

ここしばらくの「利便性を追求する」というモノ作りの流れは、個々の「弱さ」を克服することに向けられてきたようだ。いわゆる「ひとりでできるもん」をめざそうというのである。そこで一面的な利便性は高まるように思うけれど、一方では「持ちつ持たれつ」の「関係」から遠ざかっているようにも思ふ。

例のお掃除ロボットがもっと完璧にお掃除するものであつたらどうだろう。もうコードに巻きついてギブアップすることもなければ、ちよつとした段差であれ

(時間 問題用紙二枚で五十五分)

◎解答は解答用紙に記入しなさい。

ば大丈夫! 誰の助けも借りることなく、きつちりと仕事をこなしてくれる。そのことでわたしたちの手間もだいぶ省けることだろう。ただどうだろう、それでおしまいということにはならないようなのだ。

すかさず「もつと静かにできないの?」「もつと早く終わらないのかなあ」「この取りこぼしはどうなの?」と、その働きに対する要求をエスカレートさせてしまふ。そうした要求に応えるべく、技術者も新たな機能の開発に勤しむことに。ロボットの高性能さは、わたしたちの優しさや工夫を引きだすのではなく、むしろ⑥のようなものを引きだしてしまふようなのだ。

「お掃除してくれるロボット」と「それを使う人」、その役割のあいだに線を引いた途端に、相手に対する要求水準を上げてしまふ。こうした図式は、モノとの関わりに限らず、いま至るところに生じているようなのだ。

(岡田美智男『「弱いロボット」の思考』による)

問一 ⑧⑨のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ①の「ほつ」としてしまふ理由を説明しなさい。

問三 ②は、変化した結果、どんな気持ちになるというのですか。最後が「く」という気持ちの「く」の形になるように、「く」の部分にあてはまる言葉を、十字以内で答えなさい。

問四 ③が四字熟語になるように、それぞれの〇に適切な漢字を入れなさい。

問五 ④とありますが、「部屋の壁」は、お掃除ロボットにとって、どのような役立っているのでしょうか。具体的に説明しなさい。

問六 ⑤のように問いかけた筆者は、「連携プレー」が可能になるために必要なことを二点にまとめています。それはどういうことですか。二点に分けて答えなさい。

問七 ⑥に入る最も適当な言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。
ア にぶさ イ おごり ウ いかり
エ けがれ オ いらだち

問八 筆者は、お掃除ロボットの「弱さ」にはどのような意味があると考えていますか。説明しなさい。

二 登山家の田名部淳子は、東日本大震災の被災地の高校生たちを日本一高い山に登らせたいという願いを持ち、七十歳を越えた彼女自身、抗がん剤の副作用に苦しみながらも富士登山プロジェクトを継続している。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問題は句読点を一字に数えます。

「あの、私、ここで下りてもいいですか」

唐突に女の子が言った。淳子は驚いて見返した。

「そんなに体調が悪いの? 医療班、呼ぼうか?」

「いえ、そこまでじゃないですけど……」

「だったら、ここでもう少し休んで、それから登ればいいよ」

「でも」

「どうかした?」

女の子は足元に視線を落とし、「1」。

「私、何のためにこんなしんどい思いをしなきゃいけないんだろうって、登っているうちにだんだんわかんなくなってきたんです」

淳子は改めて少女の横顔に目をやった。

「そうだね、確かにしんどいよね」

「①もう、しんどいことはたくさん」

大人びたかげりが、女の子が抱える深い心の傷を映し出していた。

後から登って来た生徒らが、心配そうな顔で横を通り過ぎて行く。引率するスタッフが「私が付いていきましょうか」と声を掛けてくれたが、淳子は首を振った。

「ううん、任せておいて」

空は更に明るくなっていた。覆っていた薄雲ももう見えない。代わりに、眼下には波のような雲海が広がり、東の方が赤く染まり始めていた。

「聞いてもいい?」

「え?」

「家のこと」

「ああ……、はい」

「どうだったの?」

「津波で流されました」

女の子は「2」。そのドライな口調がむしろ重く響いた。

「そう、大変だったね」

「私は高台まで走って逃げたんですけど、できることなんか何にもなくて、町全体が壊れてゆくのをぼーっと見てただけでした。あの時の、家が壊れるパキパ

キって音とか、サイレンがわんわん響き渡る音とか、ものすごく怖くて、もう思い出したくもないのに、今もずっと耳の奥に残ってます」
テレビ画面で観た人でさえ、あの容赦ない惨状に声を失ったはずである。実際に目撃した人たちの驚愕と衝撃は想像を絶するに違いない。
「ご家族は？」

「おじいちゃん、船を見に行くつて、港に行つてそれきり」

こんな会話は、女の子をいつそう辛くさせるだけかもしれない。しかし彼女自身、抑えていたものを吐き出したがつていてるように感じられた。実際、ためらいながらも話し続けた。

「両親も弟も無事だったから、みんなによかったねつて言われるけど、どこがよかったのかぜんぜんわかんない。おじいちゃんは今も見つからないままだし、家は引越して近所は知らない人ばかりだし、お父さんは離れたところに働きに行つて月に一度しか帰つて来ないし、親戚は住んでたところが原発避難区域に指定されてばらばらになったし、学校が変わつて友達もいないし、ずっとハンドボールをやつてたのに、転校先には部がなくて続けられなかったし」

淳子はすぐに言葉を見つけれなかった。この子を襲つた出来事はあまりにも重過ぎて、押し潰されてしまうのは当然だった。そして、その経験は彼女ひとりではなく、何十万の人と重なるのだ。

黙っていると、女の子がわずかに顔を向けた。

「言わないんですか？」

「えっ？」

「頑張れつて」

淳子は女の子を見返した。

「だって、こういう話をする、いつも返つて来るのは『頑張れ』に決まつてから」

女の子の口調は硬かった。

「それ言われるの、いやなんだ」

A

小さな動物が毛を逆立てて精一杯主張するように、その身体から怒りが発されている。

「そうだよ」

頑張れ、は確かに励まし言葉だ。けれども言葉は道具でもある。どんなに便利なナイフでも、使い方を間違えれば相手を傷つける。

「そうそう」と、話を変えるように、淳子はザックを開いてタッパーを取り出した。

「いいものがあるの。食べてごらん、元気になるよ」

中には干し柿が入っている。女の子は「3」。

「ほら、遠慮しないで」

勧めると、おずおずとした仕草でひとつを口にしました。

「あ、おいしい」

「でしょう。私の故郷、三春町の干し柿なのよ。太陽の光をいっぱい浴びてるから、その分、エネルギーもいっぱい詰まつてて、疲労回復に最高の」

「うちも毎年冬に軒先で干し柿を作つてました。その時はあんまり食べる気にはなれなかつたけど、こんなにおいしかったんだ。ちよつとびっくり」

② ようやく少女らしい笑みが浮かんで安堵した。淳子も口に運んだ。自然の甘みが口の中に広がってゆく。
「あの、田名部さんつて、病氣なんですよ」

女の子が不意に尋ねた。

「そうよ。よく知つてるね」

「ネットで見たら」

病については公表しているが、子供たちには関心のない出来事と思つていた。

「それなのに、③ 何でこんなふうに思ひをして山に登るんですか？」

「うーん、難しい質問ね。そうだな、何でだろう」

淳子は逆に問い返してみた。

「何でだと思う？」

答えを探つて欲しかった。そこに、彼女が置かれた状況に繋がる何かがあるように思えた。

「そんなの、わかんない」

ぶつきらぼうに女の子は返した。

「そっか、わかんないか。そうだよ」

あはは、と、淳子は笑い声を上げた。

「その前に、聞かせてもらつてもいいかな。あなたはどうしてこの富士山登山に参加しようと思つたの？」

「おかあさんに勧められたから」

「それだけ？ 仕方なくつてこと？」

「まあ」

「だったら、行かないつて言えばよかったじゃない」

「そうだけど」

言つてから、次の言葉までに、女の子は少し間を置いた。
「でも、もしかしたら、山に登ることで自分が変わるかもしれないつて思つたんです」

それは淳子にとって嬉しい答えだった。

「よかった」

「何がですか？」

「変わるかもしれないつて思ふのは、変わりたいつて望んでるつてこと。あなたはもうちゃんと一歩を踏み出している。大切なのは、その一歩よ」

女の子は言葉の代わりに、瞬きを返した。

「私の答えも同じ。私もいつも、山に登ると自分が変わるような気がするの。子供の頃からそうだった。今も同じよ。だからずっと登り続けているの。それに、大切なことも山にたくさん教えてもらったしね」

「大切なことつて？」

「生きるつてことは前に進み続けてゆくつてこと」

それから、淳子は女の子に笑いかけた。

「急がなくていいの、ゆつくりでいいの、踏み出すその一歩が、生きている証なんだから」

女の子は手元に視線を落とし、逡巡するかのようにはばらく口をつぐんだ。すでに空は朝焼けに染まつている。橙色の光がまだ残る群青の空を凌駕してゆく。それが眼下に広がる雲海に反射して、鮮やかな色彩を溢れさせている。不意に稜線からひと筋の光が伸びたかと思うと、彼女の顔を照らした。女の子は「4」。

「来光だ」

太陽の光は刻一刻と強さを増し、女の子の顔を輝かせてゆく。その眩しさに目を細めながら、やがて女の子は指先でそつと目尻を拭つた。

「きれい……」

「うん、きれいだね」

彼女は今、何かを得たはずだと淳子は思った。その何かは、今はわからないかもしれないが、いつかきつと答えに繋がる時が来てくれるに違いない。

太陽は徐々に、そして力強く空へと昇つてゆく。

光は強大なエネルギーに満ちていた。冷えた身体の内までも温まつてゆくのが実感できる。淳子もまた、感慨に浸りながら太陽を見つめていた。

登つた山々が思い出される。千語万語を費やしても形容しがたいあの美しさ。凄烈に閉ざされた氷の世界。人間を拒否する目も眩むような岩壁。山は、大切な人に会わせてくれ、同時に容赦なく奪つていった。それでも山に魅了され、山に生きた同胞たち。淳子の軌跡がそこにある。

淳子は女の子を振り返った。

「まだ登れる？」

「はい、頑張ります」

頑張る。自分の言葉に気づいて、④ 女の子は照れたように肩をすくめた。そして太陽さえも霞むような眩しい笑顔を向けた。

「さあ、行こう」

一歩が、また始まった。

(唯川恵『淳子のでっぺん』による)

問一 本文中の「1」～「4」に入る最も適当な表現を次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を選んではいけません。

ア 面食らつたようだった

ウ はつと顔を上げた

エ 声をくぐもらせた

問二 ①の「しんどいこと」とは、この富士山登山の他に、どのようなことを指しますか、三項目に整理してそれぞれ簡潔に答えなさい。

問三 Aに入る会話文として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア そんなことないけど

ウ いいえ、励みになります

オ どうしていやなの

問四 ②について、

1 「少女らしい笑み」と対照的な表現を、本文中から抜き出さなさい。

2 淳子が「安堵した」のはなぜですか、その理由を説明しなさい。

問五 ③の質問に対する、淳子の答えとなる一文を、本文中から始めの五字を抜き出して示しなさい。

問六 ④とありますが、なぜ「女の子」は、このような態度をとつたのですか、その理由を説明しなさい。

問七 本文中で、淳子が「女の子」に最も伝えたかったのはどのようなことですか、三十文字以内で答えなさい。

考 査 番 号

問一	①	(らし)	②	(ね)	③	④	⑤
問二							
問三							
問四	行 錯						
問五							
問六	・						
問七							
問八							
二							
問一	1	2	3	4			
問二	・						
問三							
問四	1	2					
問五							
問六							
問七							